

フランツ・カフカ『失踪者』とデイケンズ

中野 有希子

I

カフカの最初の長編『失踪者』は、舞台がアメリカという具体的な場所であること(1)や、主人公カール・ロスマンが十六歳という少年であることなどの設定において、後に書かれた二つの長編とは趣を異にしている。さらに作者が主人公に対する自分自身の関心を隠そうともしていない、というプロットの指摘(2)にも見られるように、一人の少年の心の動きがそのまま映し出され、作者のカールに対するいとおしみや愛情といったものが直接的に表現されている。

それゆえ『失踪者』は、カフカ特有の寓意に満ちた『審判』や『城』に比べ、明解な比較的理解しやすい作品となっている。カフカ初期の長編のこれら内的外的な特徴は、彼自身が言及するデイケンズの影響が少なからず見られるように思われる。例えばヤノーホの回想では、カフカはデイケンズの魅力を「ものを統御していること、外

部と内部に均衡のとれていること。世界と自我の間の相関関係が巧みに、しかも非常に簡明に描かれていること。じつに自然な調和があること」と述べている(3)。ここで言及されている「世界と自我の相関関係」というテーマは、カフカが終生追求したものであるが、彼の文学世界においては、決して調和はありえなかつた。本稿では、特に日記におけるカフカ自身の指摘を手がかりとして、『失踪者』をデイケンズ、殊に『デイヴィット・コパフィールド』(以下「コパフィールド」と)との関連において検討し、カフカがデイケンズから受けた影響を考慮し、解釈の可能性を探ってゆきたい。

カフカのアメリカ小説には、デイケンズ自身のアメリカ見聞も影響している。M・スピルカによれば、それはカフカがアメリカについて洞察する上での主な資料であった(4)。デイケンズは二度アメリカを訪れているが、一度目の訪問は、旅行記『アメリカ・ノート』にまとめられ、また『マーティン・チャズルウィット』の中の詳しいアメリカ描写に結実した。これらの作品には、アメリカを約束の

地として期待していたディケンズの、実際にそこで目の当たりにした黒人差別などの現実に対する落胆や、批判が記された。ディケンズの生涯を記述したJ・フォースターはこのアメリカ訪問に十章を費やしている。スピルカの指摘によれば、カフカはこの伝記を読んでおり(5)、一九一一年の日記にカフカが「ディケンズについて読んで」と言及しているのは、この伝記のことと推定される(146)。「失踪者」の冒頭では、カールを包み込むアメリカの環境が仄めかされる。カールの乗った船がニューヨークの港に到着し、彼がまず目にしたのは剣を掲げた自由の女神像であった(49)。女神像は本来、右手にたいまつを、左手には独立宣言書を持っており、宣言書の上には「世界を照らす自由」と刻まれている。カフカの描く女神像のかざす剣は、自由を侵害する者に対しては断固戦う女神の正義を表しているというよりはむしろ、カールの前途多難なアメリカ体験を暗示していると言えよう。何故ならそれは、ナイフや包丁といった言わば裁きや刑罰による受難のイメージが付随するものに対するカフカの固執を思わせるからである(6)。そしてこの冒頭の風景によって、アメリカにおける自由と暴力の二律背反的な要素が問題提起されている。実際にはアメリカを見聞していなかったカフカのアメリカ観もまた、訪米したディケンズのそれに通じているとも言える。二度目の訪問によってディケンズは、ネガティブな見解を訂正することになったと言われるが(7)、「アメリカ・ノート」の中で彼は、アメリカにおける個人と、社会の有様を弁明しようと試みている。この試みは、『コパフィールド』においてより強く打ち出されることになる。それは、身寄りのない子供が社会にうけいれられようと努め、成熟してゆく姿に体现されている。

『コパフィールド』は、ディケンズの作品の中で、最も自伝的要素の強い作品であり、彼には珍しく終始一人称で書かれている。またその他の作中人物についても、ミコーバー氏にはディケンズの実際の父親の姿が投影されており、アゲニスやドーラたちには作者が関わった女性たちの特徴が、個々のタイプとしてではないが、十分に生かされている(8)。このようにモデルや体験を凝縮して、登場人物を練り上げることは、『失踪者』に見られるカフカの手法でもある(9)。

『コパフィールド』のデイヴィット少年は、幼くして母を亡くし、継父マードストーンとその姉によって仕事に出される(184ff)。彼はそこを逃げだし、ドーヴァーの伯母のところへたどり着く(210ff)。伯母に引き取られたデイヴィットが成長する過程がそのまま『コパフィールド』の展開となる。その中で、伯母の破産(175)や親友ステイアフォースと幼友達エミリーの駆け落ち(119)、ドーラとの結婚(1135)と妻の死(1140)、親友の死(11434)などが次々とエピソードの形で、後年文筆家になった主人公自身によって物語られるのである。テンポの早い場面転換や、次から次へとストーリーが受け継がれるという手法は、通俗小説作家ディケンズの得意とするところであり、また当時、読者を飽きさせないことが書き手に求められたための結果であった(10)。「失踪者」がカフカの長編としては場面の転換が頻繁になされていることは、『コパフィールド』に見られる展開と無関係ではないように思われる。カフカの『コパフィールド』に関する指摘は次のとおりである。

ディケンズの『コパフィールド』(「火夫」)は紛れもないディケン

ズの模倣だ。計画中の長編小説はなおさらだ。トランクの話、人を幸せにし、魅惑する少年、賤しい仕事や田舎屋敷にいる恋人、きたならしい家々など。だが、とりわけ方法。いま分かることだが、僕の意図はディケンズふうの小説を書くことだったのだ。(T391)

ここでカフカは、『ゴパフィールド』と自作との共通項をいくつか挙げてゐる。二作のストーリーを検討すると、中でもデイヴィット少年の苦難に満ちたドーヴァーへの旅路が、カールにおける二人の詐欺師に伴われたラムゼスへの道(A90)に反映されていることは明らかである。その中で特にカフカの指摘するトランクにまつわるエピソードは、いずれの作品においても主人公が詐欺師によってトランクやその中身をだまし取られたり(A103, 1213)、また僅かな所持金を巻き上げられた(A96)、といった略奪の経過なのである。細部を指摘するならば、例えばお金を得るために上着を売るという(A89, 1216)パターンも共通している。ある意味でそれは、主人公の置かれた境遇、あるいは社会の状況をも反映していると言えよう。またいずれにおいても苦しい旅の途上に、主人公は彼らの学校時代を回想しており、デイヴィットのクリークル先生と、カールのクルンパル先生という名前の近似性がスピルカによって指摘されている(II)。

少年の周りに配置された人物たち、その一例としてのカフカの言う田舎屋敷の恋人については、デイヴィットの親友ステイアフォースと彼に連れ去られたエミリー、デイヴィットの最初の妻となるドーラ、ステイアフォースとの結婚を望んでいるローザといった恋人たちが、『失踪者』においては、カールとクララ(A60)に凝縮

されていると推定される(12)。そして両小説に共通して少年に与えられた賤しい仕事としては、デイヴィットが継父マードストーンたちから強制された酒庫での雑用と、カールのエレベーターボーイとしての仕事がまず挙げられよう。カフカの言う汚らしい家々については、『ゴパフィールド』全体を通じて描かれており、カフカの小説におけるそれは、カールが警察の手を逃れて、再び詐欺師ドラマルシユとかかわり合うアパートのこと(A182)に他ならない。

しかしカフカが「とりわけ」と前置きして指摘する「方法」が何よりも、彼がディケンズから受けた影響を物語っている。「ディケンズ風の小説を書くこと」につながった「方法」とは、そしてその具体的展開の前提となる主人公の設定と、彼が置かれるアメリカの環境は、『失踪者』においていかなる意味を持っているのだろうか。

II

カールについてカフカは、次に続く長編の主人公ヨーゼフ・Kと比較して、一九一五年九月三十日の日記において「ロスマンとK。罪なき者と罪ある者。最終的にどちらもかわることなく罰として殺される。罪なき者は比較的軽い手で、打ち殺されるといふよりもむしろ脇へ押しやられるのだが」(T35)と述べている。カフカがここで言及している主人公たちは、カフカ自身の言葉を借りると「殺される」運命にあり、実際ヨーゼフ・Kは処刑される。『失踪者』は未完成であるため、カールの結末は描かれないままであり、作者の否定的な暗示が残されているだけである(13)。しかしいずれにしても、カールは罰を受けることになっていたのだろう。ただ特に注目すべきなのは、カールが「罪なき者」とされていることであり、彼

が最後に受ける処罰については知る由もないにせよ、確かに「脇へ押しやられ」て放浪するカールの旅がストーリーを担っていることである。

具体的な人物設定において、カールと彼の他の「兄弟たち」との明らかな違いは、カールがまだ幼さの残る十六歳の少年であるということである。そしてカールの性格と行動の特徴は、次々と彼に襲いかかる追放の悲劇に無抵抗に甘んじ、放浪の旅を続ける点に見られる。次の長編が、ヨーゼフ・Kが、彼を襲いかかった訴訟(Prozess)に対して行う抵抗の過程(Prozess)であるのに対し、カールの物語は、彼が追放され、受け入れられてはまた放り出されるといふ試練の連続に、抵抗することもなくただ場所を移動する過程(Prozess)なのである。

カールのこうした特性には、彼が無邪気な未成年である点が作用していると推測される。さらにその性格描写には、少年独特の純粋さや善意といった人間性を感じ取られる。これについてR・ムージルは「幼年時代に封鎖された善に対する情熱」や「根源的な善意への衝動」、「倫理的な繊細さ」を強調している⁽¹⁴⁾。そしてカールは、その「真に道徳的な行動」ゆえに本質的に罪がないということになる⁽¹⁵⁾。カフカは、「失踪者」の第一章を「火夫」として出版するに際し、クルト・ヴォルフ杜宛てに「火夫」、「変身」、……そして「判決」は外的にも内的にも一体をなしています。これら三つの作品には、明白な、そして何よりも密やかな関連があり、これらを例えれば「息子たち」というタイトルをつけた本にまとめたく思っています⁽¹⁶⁾と書いている。カフカのこの発言は、「失踪者」全体についてではないにせよ、彼がカールを息子として念頭においていたこと

を示している。W・ヤーンによれば、カールは女中に誘惑されて息子をもうけ、言わば事実上「父親」でありながらも、両親によって追放された「息子」としての姿のみを読者に提示している⁽¹⁶⁾。

成人として登場する他の二人の息子たち、ゲオルク・ベンデマンとグレーゴル・ザムザには、社会、家族、とどのつまりは父親との確執の結果としての死が用意されているが、未成年であるカールの場合は、両親によって追放され、アメリカという未知の現実の世界の中での試練が続く。これはある意味で、「死」でもって罰せられる成人した息子たちの前身としてのカールの、罰にいたるまでの試練であると言える。罪なき者でありながら、やがて罰を受けざるを得ないという少なくともカフカの念頭にあった「失踪者」の設定は、身に覚えがないのに付与された罪によって下される罰、というカフカ特有のモチーフへと発展してゆくのである。そしてここにカフカが「方法」を模倣したとして、他の作家、例えば罪と罰というテーマをそのままタイトルにして扱ったドストエフスキーではなく、ディケンズの名を挙げた理由がある。

ドストエフスキーの主人公の大学生、ラスコーリニコフが犯した直接的な罪は、「非凡人は人類のために凡人を踏みこむ権利がある」という妄想でもって、金貸しの老婆とその場に現れた彼女の妹を殺したことである。つまり彼の罪は、殺人という行為による現実のものであり、故意に行われている。彼の世界では、行為が明確で道徳的なパースペクティブによって語られ、判断されている。カフカはドストエフスキーを愛読していたが、確信犯としてのラスコーリニコフは、決してカフカの意図するモチーフとは関わりがないのである。

カフカがディケンズに引きつけられた理由として、E・テドロックは両者に共通の「道徳的、感情的な曖昧さ」の要素と曖昧さとそれをもたらす「現実の歪み」を表現するための「グロテスクという技法」を指摘している(17)。スピルカは他方でこの技法を、二人の作家に固有な、世界に対する子供の視界と関連づける(18)。カフカがディケンズにおいて殊に着眼したのは、子供のパースペクティブであり、子供らしい無邪気な敏感さ、感受性が、両者にとって何よりも重要だったというのである。実際ディケンズの作品には子供、それも特に親のいない子供が頻繁に登場している(19)。

『失踪者』においては孤児ではなく、追放された子供であるが、いずれにせよ幼い孤独なさすらい人には、特別な意味が伴っている。なぜならその無垢な存在によって、彼を容赦なく苦しめる環境の冷酷さが強調されるからである。カールは故郷からアメリカへ、ニューヨークの伯父のもとからホテル・オクシデンタル、ホテルからブルネルダの家、というように、明確に描写されているだけでも三度にわたって追放される。そのたびに変化する彼を取りまく環境は、一貫してカフカの持っていた、当時の最新のメカニズムを備えた巨大なアメリカのイメージである。その風景の中で、孤独な子供が、罪がないにも関わらず運命に翻弄される構図、要するに処罰されるという展開は、カフカの描く社会での主人公の悲劇性を一層高めていると言えよう。また社会がこうした社会的弱者の立場から批判的に描かれるという点に、この小説のピカレスクとしての性格が明確に見出されるのである。

III

スペインで発祥したピカレスク小説(20)は冒険小説の一種で、その中心人物は悪漢(ピカロ)である。主人公の冒険が自伝的ないし伝記的形式のなかで物語られ、エピソードの連続によって構成されている。教養小説や発展小説における主人公は、遍歴によって人格と自己を形成し変化してゆくのに対し、ピカレスク小説の主人公たちは一貫して冒険家、悪者、単純な愚者、無一文の人物をなймаぜにした存在であり、彼らは常に社会の局外者の立場にある。社会的に低い彼らの目線から社会が風刺され、批判的に描かれるのである。こうした手法を借用してディケンズは、社会的な問題を取り上げた(21)。

『コパフィールド』では、幼いデイヴィットが、苦勞しつつ文筆家へと成長する姿と共に、継父マードストーンやユライア・ヒーブといった悪人を始め、数多くの登場人物が各々特徴的に描かれている。特に社会悪が暴かれ、裁かれている点として挙げられるのはやはり、デイヴィットが奉公している時に苦勞を共にし、社会的弱者として描かれつづけてきた友とも言うべきミコーバー氏が、ユライア・ヒーブの罪を暴き、監獄送りにしたこと(11379)に続き、オーストラリアに移住して政治家として立身出世を果たしたこと(11526)であろうか。デイヴィットの成長と成功のストーリーは勿論であるが、それと共に、ヒーブの裁きに見られるような社会的風刺が、この作品の性格の一つである。

『失踪者』におけるディケンズの影響に言及したカフカは、さらに「僕が時代から奪い取ってきたより鋭い光りと僕自身から発した

であろう弱々しい光りが加えられている」(F301)と付け加えている。ここでは「鋭い光」と「弱々しい光」が対になっている。カフカ自身に由来する後者は、裁かれ、罰として殺される息子たちの最初のかたちであり、無力で無抵抗なカールの姿であろう。それに対して前者は、カールを取りまく巨大なアメリカという社会であり、それはカフカがディケンズを始め、フランクリンや、ホリチャー、ソーク博士といった情報源から得たアメリカ像に他ならない。

ニューヨークにたどり着き、アメリカを歩きはじめたカールの周りの世界は、動きに富んだ、物質的な意味で生産的な資本主義社会というイメージを与える。しかしそれはまた、社会の大きな組織に個人が組み込まれた、機械的で非人間的な構造と表裏一体なのである。カールが直接関わることになるアメリカ社会を表現しているものとしては、ヤコブ伯父の行っている運輸代理業(A21)や、カールがエレベーターボーイを務めるホテル・オクシデンタル(A22)が挙げられる。W・エムリッヒによると、オクシデンタルというホテルの名には、巨大企業、ヨーロッパから見て西に位置するアメリカの文明が象徴されている(22)。伯父の事業やホテルにおいては、アメリカの産業社会と、それに必然的に付随する労働生活が示されている。

作中には、アメリカとヨーロッパという対比がいくつか見られる。当時のヨーロッパでは、アメリカは自由と民主主義に代表される新しい憧れの地であった。ヨーロッパ人のアメリカについてのポジティブな先入観に対してカフカは、ネガティブなアメリカ像を突きつけており、それはアメリカの実際の状況にかなり近いものであったとA・ヴィルクナーは指摘している(23)。「失踪者」からはカ

フカのアメリカ資本主義社会への批判を読み取ることができるのである。カフカは、カールが追放される舞台として新大陸アメリカを設定し、エムリッヒが現代産業社会の詩的暴露と呼ぶように(24)、産業社会に伴う労働問題を文学化したのである。

そこでは、ディケンズも批判したアメリカ社会の奴隷制度もまた仄めかされている。オクラホマの劇場で採用された時、カールは自分の本当の名前を言うのがはばかられ、「最後の職場で呼ばれていたあだ名」(A23)である「ニグロ」を名乗る。この「ニグロ」については特に、アルトゥール・ホリチャーの旅行記『アメリカ今日と明日』に掲載された写真との関連で論じられることが多い(25)。「オクラホマの牧歌」と題されたその写真では、一人の黒人が絞首刑に処せられており、それを白人たちが取り囲んでいる。アメリカの白人社会にとって差別され、苦悩に満ちた歴史を生きてきた黒人を暗示するあだ名をカールに名乗らせたのは、常に周りの世界によって追われつづける彼の運命を、アメリカに生きる黒人のそれと重ね合わせていたのかもしれない。

さらにG・ローゼは、「失踪者」においては誰をも受け入れる劇場の所在地であったオクラホマが、実際はニューヨークやペンシルヴァニア、カリフォルニアのような、ユートピア的な建設の試みがなされた州に属しておらず、相続権と人権を奪われた北アメリカの先住民の避難場所であったことに着目し、カフカが彼らに関心を持っていたこと(26)と関連つけている(27)。白人によって安住の地を追われ彼らも、差別され、苦しめられたことでは、黒人と同じである。いずれにせよカフカがここでアメリカの白人社会への批判を持ちながら、カールのあだ名に追放され、無一文の存在の意味をこめ

ていたことは疑いようもない。

カールの眼を通して語られる社会は、カールが無垢な少年として、なすすべもなく無抵抗に流されてゆくことで、より一層その非情で冷酷な有様を見せつけることになる。このことをヤーンは、カフカの作品において、『失踪者』ほど世界の対立が冷淡に徹底して鋭く形成されているものはないと述べている⁽²⁸⁾。つまりカールという人物を世界に對置させたことで、彼と敵意に満ちた社会とのコントラストが際立つことになる。こうした社会批判によって『失踪者』はディケンズの小説と同様に、場面転換の早いエピソードの連続という、形式的特徴に加え、内容的にもピカレスク小説としての特徴を備えている。

カフカはディケンズの『オリヴァ・トウイスト』と『コパフィールド』の主人公を並べて「カールの遠い親戚」と称している⁽²⁹⁾。しかしカフカがここで言及しているディケンズの小説には、既に述べたように勸善懲悪の意味も含めて幸福な結末が与えられていた。一方『失踪者』の場合は、その書かれざる結末において、最終的に明るい未来社会が展開される可能性は低い。カフカのアフォリズムに、「おまえと世界との戦いでは、世界を支持すること」(H34)という言葉があるが、カフカにおいては、「世界」としての社会が常に勝利をおさめ、勸善懲悪はおろか、主人公もやがては罰せられるという、ネガティブな結末が予測される。これはカフカ自身が、自分を取りまく外界、つまり社会に対して、常に挫折せざるをえないことを強く自覚していたことによるものであろう。

注

カフカ、およびディケンズの著作からの引用は次の略記号を用いて示す。なお、引用文の邦訳については、『決定版カフカ全集』(新潮社、一九九二年)を参考にし、必要に応じて若干の改変を行った。

Kafka, Franz: Gesammelte Werke. Taschenbuchausgabe in acht Bänden. Hrg. von Max Brod. Frankfurt/Main. (Fischer) Amerika (= A), Briefe (= B), Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande (= H), Tagebücher 1910-1923 (= T), Der Prozeß (= P).

Dickens, Charles: The Works of Charles Dickens. In Thirty-four Volumes. With introduction and notes by Andrew Lang. David Copperfield. Vol. I (= D), Vol. II (= II) New York. (Charle Scribner's Sons) 1899.

(1) カフカのアメリカについての情報源としては、マックス・ブローットの指摘するフランクリンの自伝や、アルトゥール・ホリチャーの旅行記(Vgl. Franz Kafka. Kritik und Rezeption 1924-1938. Frankfurt/Main (Fischer) 1983. S. 188.)やカフカ自身が訪れたというソーク博士の講演(T204)などが挙げられる。

(2) Franz Kafka. Kritik und Rezeption 1924-1938. Frankfurt/Main (Fischer) 1983. S. 189.

(3) グスタフ・ヤノーホ『カフカとの対話』筑摩書房、一九九四年、二二六頁。

(4) Spilka, Mark: Dickens and Kafka. London (Dennis Dobson) 1963. S. 126.

(5) Spilka: a.a.O. S. 127.

(6) 『審判』(P193)の結末がその代表例であり、また『日記』にも「しきりに一本の幅の広い肉切り包丁が思い浮かぶ。それは大急ぎで機械的な規則性をもって横からわたしの中へ食い込み、この上なく薄く胸を輪切りにする」(T223)と記されている。

(7) Spilka: a.a.O.S. 129.

- (8) 中野好夫「チャールズ・ディケンズ—人と作品—」『ディ
ヴィット・ロパフィールド』新潮社、一九九八年、四〇二
頁。
- (9) Vgl. Spilka: a.a.O. S. 135.
- (10) ディケンズは一つの社会的な問題を一篇の中心に据え、その
周囲に複雑なプロットを發展させて、一つの統一ある社会図
を描き挙げようとした。(小松原茂雄『ディケンズの世界』三
笠書房、一九八九年、三〇頁。)
- (11) Spilka: a.a.O. S. 132.
- (12) Spilka: a.a.O. S. 133.
- (13) プロットの初版のあとがきにおいては、ハッピーエンド的な
結末をカフカが語ったことが言及されているが、ここではカ
フカの言葉を重要視したい。
- (14) Franz Kafka. Kritik und Rezeption zu seinen Lebzeiten 1912-1924.
Frankfurt / Main (Fischer) 1979. S. 35.
- (15) Spilka: a.a.O. S. 139.
- (16) Vgl. Jahn, Wolfgang: Kafkas Roman „Der Verschollene“ Stuttgart
(Metzler) 1965, S. 122.
- (17) Tedlock, B. V. Jr.: „Kafka's Imitation of Copperfield“ in : Com-
parative Literature, VII (Winter 1955) S. 61.
- (18) Spilka: a.a.O. S. 136.
- (19) 例えばオリヴァー・トウィストや『骨董屋』の少女ネル、『大
いなる遺産』のピップが挙げられる。
- (20) Vgl. Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. Hrsg. von
Merker Stammler Vol. 3. S. 164ff.
- (21) 小松原 前掲書 四六頁、五一頁。
- (22) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka. Frankfurt / Main (Athenäum) 1957.
S. 230.
- (23) Wirkner, Alfred: Kafka und die Außenwelt. Quellenstudien zum
„Amerika“-Fragment. Stuttgart (Ernst Klett) 1976. S. 59.
- (24) Emrich: a.a.O. S. 227.
- (25) Vgl. Gerhard Loose: Franz Kafka und Amerika. Frankfurt / Main
(Vitorio Klostermann) 1968. S. 69.
- (26) カフカは初期の短編集『観察(Betrachtung)』の中で、『インディ
アンになりたいた願ひ(Wunsch, Indianer zu werden)』というス
ケッチを残している。また時期的には下るが、一九一七年の
日記に、北アメリカ先住民族についての断片が見られる
(T385)。
- (27) Loose: a.a.O. S. 69ff.
- (28) Jahn: a.a.O. S. 122.
- (29) ヤノーホ 前掲書 三二六頁。